

# サバヒーの種苗生産技術開発

鹿児島県水産技術開発センター 種苗開発部 野元 聡

## 1 目的

本県の基幹漁業であるカツオ一本釣り漁業は、奄美大島南部では自家採捕したキビナゴを撒餌にし、古くから操業が行われている。しかし、近年キビナゴの漁獲が不安定となり、カツオ一本釣り漁業の操業にも支障をきたすようになった。

このような状況の中、奄美地域の漁業者から、安定的かつ大量に確保できる活餌を開発するよう強い要望があり、県では東南アジアで広く養殖されているサバヒーに着目し、平成12年度から行った「サバヒー餌料化試験」にてインドネシア産種苗（全長12mm）を用いた稚魚飼育技術の確立、および活餌有効性の実証がなされた。そこで、平成16年度からは「内水面種苗生産技術開発研究」として、輸入種苗に頼らない国内での種苗生産技術の開発に取り組んできた。

## 2 これまでの実績

### （親魚養成）

平成16年4月から平成10年度より内水面分場にて淡水での養成を行っていた親魚を使用し海水による親魚養成を開始。冬場の水温は20℃以下にならないように加温水を用いて養成した。平成17年10月には卵黄形成ホルモン放出ホルモン（LH-RH）を全ての親魚に接種したが、産卵等は見られなかった。平成18年4月からは大型水槽（100t円形水）での養成を行い、その結果平成18年8月下旬に産卵を確認した。その後産卵回数21回、総卵数365万粒を採卵することに成功した。

### （種苗生産）

採卵された卵を用いて合計3回の種苗生産試験を行った。内2回は日令5～6に摂餌不良が原因と思われる大量減耗が発生し生産までは至らなかったが、9月4日から開始した3回目の試験においては、良好なワムシの初期摂餌が見られ大きな減耗もなく、日令56で17千尾（平均全長43mm）の種苗を生産することに成功した。

また、その他にも採卵された卵によるふ化試験を行ったが、ふ化率が7～30%台の非常に低い値を示し、卵質及びふ化までの卵管理に問題があるのではないかと考えられた。

初期の摂餌不良対策として、浮遊珪藻を用いた摂餌試験も行ったが、ワムシとナンノクロロプシスのみでも十分な摂餌と生残を示した。

## 3 今後の課題

### （親魚養成）

今回産卵まで到った原因としては、海水による長期の養成、冬場の水温管理、成熟産卵に適した大型水槽での養成等が考えられる。今後は引き続き今年度同様の環境にて養成を行い、来年8月頃の採卵を目指す。また、今年度の試験結果で卵質に問題がある可能性が

示唆されたため、卵質向上のための給餌飼料の検討等も行う。

**(種苗生産)**

ふ化率向上のための卵管理手法（収容密度、通気方法等）や仔魚期の適切な飼育環境、給餌系列の確立を図り、生残率向上を図る。

**(その他)**

現在（独）水産総合研究センターで行っている、遠洋カツオ一本釣りでのサバヒーの操業試験等の結果を見ながら、他の活餌を用いた一本釣り漁業を含め代替餌料としてのサバヒーの普及を進める。